
魔法少女リリカルなのは 　　† 空色の弾丸は闇を切り裂いて †

ブルッカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 十空色の弾丸は闇を切り裂いて十

【Nコード】

N8169T

【作者名】

ブルツカ

【あらすじ】

四年前、両親を殺された青年は旅に出る

しかし、その四年前からとある『計画』は作動していたのであった。
・
・

空を飛べなくなった主人公は、はたして再び晴天に舞えるのか・・・

オリジナル主人公を混ぜたりリリカルなのはStrikerS再構成物語です。それらのものが苦手な方はブラウザバックを推奨します

が、批判も受け付けますのでご意見お待ちしております

プロローグ

ある日、青年は飛ぶことを辞めた――――

「……なんで、なんでこんなこと」

青年の澄んだ翠の瞳が、今は酷く濁っている
そして、その手にはまだ温かい血が、思想のなかに逃げようとした
自分を現実に取り戻す

「あ、ああ……………」

そしてその酷く濁ってしまった瞳は、二人の男女へ向けられている
一人の女性は、無惨にも鍵爪のようなもので体を引き裂かれ……
男性のほうは、女性を守ろうとしたのか、女性を庇うようにして背
中を引き裂かれ死んでいる

「嫌だ……こんな……こんな……………」

その青年は数歩歩くと膝を突き、破られた天井から星が満点に輝く
空を見上げる
力なく濁った瞳は、その全てを振り払うようにして、叫んだ

「うわあああ……………ッ!!!!!!!!!!」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

その日から、青年の夢は、目標に変わった

それは――――復讐

「（殺す……絶対に、殺してやるぞ………！）」

その夢の為、青年は一番毛嫌いしていた組織に入隊したのだが、それすらも休隊届けを出した

その際、天才と呼ばれた友人に引き止められたのだが、関係なかった

強くなる為なら何もかも捨てる覚悟で、青年は旅に出た

何処へ行くかは分からない。何をするかも分からない。永遠と呼ばれる旅へ……

プロローグ（後書き）

感想、評価等。随時お待ちしております

CHAPTER 1-1 機動六課

side 高町なのは

……私の先輩であり、親友であった『あの人』が姿を消して、四年が経った

時が経つのは早いね。などと親友二人と話あっているこの場所は、つい最近私の親友が発足した部隊。『機動六課』という部隊だ

部隊員は全て輝かしい未来を約束されたような人材ばかりであり、その中でぶつかる壁をいとも簡単に打ち破ったのは、私の目の前で呑気にお茶を飲んでいる私の親友

「それにしても、魔力リミッターなんて良く考えたよね。はやてちゃん」

「あはは♪ こういう小細工は私大得意なんよ」

目の前で手を振りながらその独特な喋り方をするのは『八神はやて』。十年前のとある事件で魔法にかかり、そして現在は一部隊の部隊長にまで駆け上がった、ある意味天才な子。そして……

「でも、これから私たちも楽はできないよ？ 新人達のこともしっかりサポートしなきゃね」

「そうだね、フェイトちゃん」

この子の名前は『フェイト・T・ハラオウン』。はやてちゃんと同じく十年前からの親友であり、パートナー的存在でもある彼女は執

様子も無く、それぞれの武器の調整を行う

一人はオレンジの髪をツインテールに纏めたガンナー。そしてもう一人は、その鮮やかな緑色の髪を翻して呑気にも鼻歌を歌いながらその見事に磨かれた短剣を見て微笑んでいる

しかし、その微笑も一瞬で、すぐに青髪の少女へ呆れた目線を飛ばしながら話しかけた

「おいこらスバル。試験前にてめえの機動力削がれたら溜まったもんじゃねえからそれ以上暴れんなよな」

「あ、酷いよイツキ。ちゃんと油注してきたよ？」

「うるさい。拒否権は認めない、その有り余った元氣は試験で使いなさい」

「うゝ……はーい」

「よし、いい子だ」

短剣を自らの腰に差した後、イツキと呼ばれた青年はスバルという少女へ向かって言葉巧みにウォーミングアップを済ませると、素直に従ったスバルの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。その不器用さが漂ったものだが、スバルは気持ちよさそうに目を細めていた

しかし、それはもう一人の相棒の言葉によって中断される

「ほらあんた達。いちやついてないでさっさとこっち来る。試験内容説明、始まるわよ」

「うっせえなティアナ。これはいちやつきではないと何年も前から説明してますよ？イツキさんは」

ティアナと呼ばれた少女は手動式の銃の弾を込め、時間を確認した

その時、宙にモニターが出現した

『おはようございま〜す！魔導師試験の受験者三名。揃ってますか〜？』

「「はい！」」

「うっす」

モニター内に現れた女性の問いに、若干一名砕けた挨拶をしているものがいるがここは割愛させてもらおう

『確認しますねー？ 時空管理局、陸士368部隊所属のスバル・ナカジマ二等陸士と』

「はいっ！」

自分の名前が呼ばれたと同時に元気のいい挨拶が返ってくる。それを満足げに思った女性は次の確認に移る

『いい返事です！ そしてティアナ・ランスター二等陸士』

「はい」

先ほどの元気な声とは打って変わって冷静な声。その真面目なオーラ全開故か。と女性は心の中で納得した

『そして最後に、イツキ・ラングエル二等陸士』

「ういーす」

「あんた！相手は上司なんだからもう少しまともに返事しなさい！」
「いってえっ！？おい、いきなり叩くなよティアナ！！」

ポケットに手をつ込み、ティアナとは正反対のだらけオーラ全開の声に思わずティアナは思いつきイツキの頭を引っ叩いた。その試験前とは思えないリラックスした雰囲気、女性に苦笑いしながら確認に移った

『所有魔導師ランクはC、今回受けるのはBランク。で間違いはないですか？』

「あ、はい。間違いねーっす」

しっかり話は聞いているのか、イツキの気の抜けた声が返答に返されると、それによし。と手に持っていた資料をデスクの上へ載せる。そして見事な敬礼と共に自分の名を名乗った

『はい。本日試験官を勤めさせていただくのは私、リインフォース？空曹長です！試験前に、何か質問等がありますか？』

「あ、ちよつといーっすか？」

その敬礼を返した後、今までだらけた様子で話を聞いていたイツキの手が上がった

『はい、答えられる範囲でしたら、いくらでもどうぞです！』

その子供らしさ全開の笑顔に苦笑しながらも、イツキは周りのビル郡を指で指した

「この地形にあるもの、全て利用しても構わないっすよね？ほら、鉄屑とか」

『鉄屑……？ あ、はい。監視用スフィアなどを壊されない限りでは、OKですよ！』

「ありがとうございませーす」

『では、よろしくお願いします！』

「「よろしく願います!（しまーす）」

その敬礼が交わされたとき、上空では二機ののへりが飛んでいた

「ほえ……リン、しっかり試験官しとるなあ」

「ほらはやて！ ドア全開だと落ちちゃうから、閉めて閉めて」

「ふふっ、はあ、いい」

へり内にいるのはフェイトとはやての二人。モニターに映し出された三人の姿を見て、フェイトは問いかけた

「これがはやての見つけた子達？」

「そーや。中々ええ子達なんよ？ 伸びしろもありそうやし」

「今回の出来がよければ、正式に引き抜き。かな？」

「うーん……正式判断はなのはちゃんに一任しておるしなあ。それにほら、今回は確実に取れそうやないか？ Bランク」

「どうだろうね。試験は最後まで分からないから」

「うーん……でも、正式に決まったらなのはちゃんの下と、教える子になるわけやしな」

『では、説明したルールは以下の通りです！わかりましたか？』

「「はい！」」

その返事の中に、既にイツキの声はない。その目はゆっくりと、辺りを見回していた

『では、カウントダウン開始です！頑張ってくださいねー！！』

その声と共に、モニターが切り替わり、赤色のランプが三つ表示される

その様子を見たのかイツキは表情を戻し、素早く二人に指示を与えた

「よし、お前等は昨日の予習どおりコンビネーションで各スフィア突破。俺は適当に援護とゴミ掃除してやるから」

「OK！」

「やるからには絶対合格しようね！二人とも！！」

その短いやり取りの中で、ランプは三つとも消滅。『Strat』の一字が表示された途端、一斉に二人は走り出した

そして、ヘリ内では……………

「お、始まった始まった♪」

「お手並み拝見。だね…………あれ？彼だけ動いてないよ？どうしちゃったのかな…………」

モニターの中には走る二人と、スタート地点から微動だにしないイッキが映し出されている

その目は何かを想像するかのごとく瞑られており、まるで周りの世界が止まってるように思えた

「おろ……？ タイムアタックでこのタイプは珍しいなあ……ま、そのうち動きだすやろ？ って……いない」

「えっ！？ き、消えた！？」

そのモニターには、一瞬目を見開いた瞬間。消えたイッキの姿が映し出されていた

sideイッキ

5……………6……………7……………よし、やっぱり一回にはダメー無しつと。

では俺も、動きますかあ……！

「……………！」

一瞬、目を大きく見開いた俺は瞬時に行動を開始する。それは時間のかかり、場所がばれてしまう転移魔法と違って、機械には明らかに不利な動き。それは……

「ただ単に、走る……！」

そう、それだけで常人の視界から俺は外れる事ができる。それは独特の走り方にあった

単に走るだけじゃ視界から外れる事もできないし、足音でばれてし

まう。だから俺なりに研究して、編み出した高速移動法。その名も……

「我流短剣術。一の型、『暗瞬歩』」

そう名前を呟いた瞬間。一回の窓から俺が飛び出し、手元のスイッチを握る

瞬歩とは、暗殺術によくある足をつけた途端にすぐ足を出し、それを繰り返す事で足音を消す事ができる歩行法の一つ。その速度をもっと早くすることで明るみのなかでも姿を見えなくすることが出来る

ただし、俺も常人なので脚力にも限界がある。だからこれが発動できるのは三十秒のみだ

ちなみに、短剣術関係なくね？とかいう突っ込み無しね。さて……

「吹き飛ば馬鹿野郎」

カチッという子気味いい音と共に暗瞬歩で柱にくっつけてきた魔法爆弾を全て起爆させ、一階部分だけを沈める。ふっ……相変わらず俺ってこういう地味なところでいい働きするのよね

S i d e o u t

「イツキあんた！あたし達まで潰す気！？」

「へーきですよ。イツキさんは小細工と演算だけが取り柄だね。きちんと垂直に落ちるように爆破しましたよ」

再び暗瞬歩を使い合流したイツキは、ティアナの小言を見事に受け

流してからスバルを抱えて脱出する

アンカーガンで先にビルについていたティアナは、顔に青筋を浮かべながら先ほどまで自分たちがいたビルを見ていた

そこにあつたのは、見事に垂直に沈んでいくビル。幸いにダミーは無かつたらしく、音を立てて崩壊していくビルを眺めてイツキは楽しそうにはしゃいでいた

「おっ！大成功じゃん！！さっすが俺！天才！！」
「うっさいわよ馬鹿」
「っていつてえ！？」

そのはしゃいでいた緑頭をアンカーガンで叩いてから、ティアナは時間を確認した後、二人の顔を見てから話しかけた

「うん。いいタイムね、この上に登ると多分スフィアの集中攻撃が来るからあたしとスバルはオプティクスハイド。イツキ、あんたは適当に摺り足でもやってごまかしなさい」

「摺り足じゃねーし。暗瞬歩だし、いいよやってやろーじゃねーか
」

その安い挑発に乗ったイツキはすぐさまその場から消えた。相変わらずせっかちな……とティアナはため息をつきながらアンカーガンを天井に向けて構えた

その数秒後、アンカーガンが天井へ刺さり、そのワイヤーを引き上

げる

スフィアはその瞬間を狙って集中砲火をかける。が……………それは囿上って来たのはアンカーガンのみ。そして……………天井からそれはやってくる

「うらああああッ!!」

いつ上っていたのか、天井を壊して落下する力を短剣に籠めてスフィアを三機ほど切り裂く。そして、未だ放火するスフィア四機のうち一機に向けて、ワイヤーの先に刃を仕込んだものを投げ込む

そのワイヤーは見事スフィアに突き刺さり、瓦礫に身を隠したイツキはワイヤーを引っ張り、その横に並んでいたスフィアへぶつけて爆破した!

その時、ヘリ内では……

「ああゝなるほどね。鉄屑を使うってこういうことだったんだ」

「苦手な遠距離を敵を利用して攻撃する。中々頭のきれる子やないか。これは成長が楽しみやな♪」

その咄嗟の判断に舌を巻いていた。だが……………

「でもはやて。あの子達も、中々やるよ?」

「ほえ?」

画面に向けて優しい笑みを浮かべているフェイトの目線の先には、

ビルの中で奮闘しているティアナ、スバルが映っていた

「5……4……3……！」

イツキがスフィアを引きつけているその時、誰もいないはずの空間にティアナの声が響く

それと同時にローラーがスフィアを捕らえ、そのまま吹き飛ばす

「2！」

そのカウントの声と共にスバルのナックルと、イツキの短剣から薬莖が排出される

その増加された魔力反応にスフィアはスバルとイツキのほうへ集中するが、それこそが狙い

「っしやあっ！！！」

「はっ！」

スフィアの弾丸を避けながら突進するイツキと、高く跳躍するスバル

そして狙いは定まったとばかりに大量の魔力スフィアを魔方陣を敷いて現れたティアナにより、スフィアを囲むトライアングルが完成した

「0！ クロスファイアー……！」

「リボルバァァ……！」

「ヴァリアブルランサー……！」

ティアナの掛け声と共に、全員の斉掃射の準備が整った。そして……

「「シューッ！！！」」

橙色の弾丸と、螺旋状に渦巻く風の衝撃。そして銀色に輝く槍が同時にスフィアへ突き刺さり、爆ぜた

そして、残るはダミーだけになった為中央に集まるティアナ達

「イエーイ！一発！一発だよ！？凄いよね二人とも！！」

「んゝ……俺の槍あんま命中率ねえしなゝ」

「あんだけ時間あったなら当然よ。ほら、あたしもイッキも本番に強いんじゃない？ってッ！？」

アンカーガンを回収してスバルに話しかけたティアナは、煙に隠れていて今まで見えなかったスフィアの姿を捉えた

「スバルッ！イッキ！防御！！」

「はあっ！？」

「嘘ッ！？」

その叫び声に反応した二人は、放たれた弾丸を反射神経のみで回避する。が……

「っつ！！」

「ティアナッ！！」

走りながら弾丸を放っていたティアナの足首から、嫌な音が鳴る。

それにいち早く反応したイッキがティアナを抱きかかえて瓦礫の壁へと滑り込んだ

「ランサーセット！ シュートッ！！」

咄嗟に銀色の槍を三つ出現させ、放つ。が、完全に狙いが固定されていなかったのか一本の槍が狙いを逸れて、監視用のスフィアへと突き刺さり、爆発した

その後、ティアナの捻挫が発覚。このあと中距離射撃型スフィアが控えている事もあって、絶望的な状況へ三人は陥った

「あ、あんた達……あたしのことはいいから、先に行つて。二人の機動力なら最終関門は楽に進められるから」

「ティアア!?」

「おい……冗談だろ?」

ティアナの突然の言葉に、二人は何故という単語が頭から離れない訓練校からの友だからこそわかることがある。この試験に落ちたらどれだけ未来に響くか、それを見越しての判断に、驚愕していたのだ

「冗談なんかじゃない……! あたしは! あんた達に迷惑は掛けたくないの!!! 今まで沢山恩を受けて、それを仇で返したくないのよ!」

「ティア! 私は、ティアの苦労も、努力も、全部見てきたよ!? それなのに、私たちの三年を迷惑って言葉で片付けないでよ!? ティアは私たちに迷惑なんか掛けてない! 恩があるのはこっちだよ!」

「じゃあどうするのよっ!! ただでさえ機動力のないボックスが走れない状況で、最終関門なんか抜けられるわけ「いや、ある」イッ……キ?」

ティアナとスバルの口論に一度も口を出さなかったイツキの声に、ティアナは呆けた声をあげる。その目線の先には、意地悪い笑みを浮かべた戦友がいた

「スバルと俺が夜通し考えた裏技。反則ギリギリ、試験官の目を欺けるかどうかキープポイントのな。それに……お前は俺たちに迷惑を掛けた。そう言ったよな?」

「ええ、だって……その通りじゃない」

顔を俯かせながら呟くティアナに、イツキは短剣をくるくると回して腰のホルスターへと収める

そして再び意地悪い笑みへ戻すと、こういった

「なら俺たちも同じだ。俺たちはお前に迷惑を掛けたしな。どっちもどっち。つーか今此処でお前に脱落されたら、俺たちはゴールデントリオじゃなくなっちゃうじゃねえか」

「そうだよ。ティア、私たちは三人揃ってじゃないと。ね?」

再び調子を取り戻したスバルの声に、ティアナは決意を宿した目でこたえた

「……あんた達。失敗したらただじゃ済まさないわよ!!」
「おう!」

ティアナのその顔は、
清清しい笑みだった

CHAPTER 1-1 機動六課（後書き）

主人公が出ません（泣

ええ、再うpなので分かりますよ。ここで出ないのは
ですが明言しておきますと、イッキ君はサブ主人公なのですよ

この話だけ見ると完璧イッキ君が主人公なのですが、後々出てきま
すので読んでくれている読者という名の神様方は楽しみにしてい
てください^^

CHAPTER 1-2 機動六課

試験場 最終滑走路

「……………ッ！」

「あ、出てきた！」

「うん…………あれ？ あれって…………」

全力で疾走するティアナを見て、安堵と疑問が浮上する。が……

ガアアアンツ！

とけたたましい音と共に、ティアナは閃光の中に呑みこまれ、爆ぜる

「うっわ、直撃？」

「ううん、今のは…………幻術」

フェイトのその言葉と同時に、何人もの『ティアナ』が物陰から姿を現し、走り出す

その本体は、道路が崩れた場所を利用して、その橙色の魔方陣を展開していた

「フェイクシルエット…………まだ未完成で、魔力消費が激しいんだから、さっさとしないさよ、馬鹿二人！」

その言葉は念話となり、ビルの屋上に構えているスバルと、その下の階にて短剣を居合いのように構えているイツキへと届く

「うん！」

「あたぼうよッ！」

その言葉を発した瞬間。二人にそれぞれの魔力光の宿った魔方阵が展開される

「あたしはティアみたいになりたくないし、空も飛べない。遠くまで届く攻撃も無い……だったらあたしは！ 全力で走るだけ！！」

「俺はスバルのように馬鹿でかいアタックも無いし、ティアみたいな精密射撃も無理、でも……仲間の走る道作るくらいなら、いくらでもやってやる！」

その言葉と共に、イツキは駆け出す。そして、ガラスを破って飛び出した！

「いくぞスバル！ きっちり乗っかれよッ！！」

「おうっ！」

その時、イツキとスバルの頭に、それぞれの空を目指すきっかけになった人物が映る

（だけど、強くなるんだ！ あの人みたいにッ！）

（俺に、俺だけの『魔法』を覚えてくれたあの人みたいにッ！！）

イツキの閉じたその目が開かれたとき、そこには決意の色を示した銀色の目があった

そして、それはスバルも同様。イツキは居合いの構えを、スバルは

スタートダッシュの構えを……

「短剣拔刀術、式の型ッ！！」

その言葉と同時に、短剣から葉莢が三つ。排出される

———
アギト
亞銀徒ッ！！！！

そしてその落下の中、イッキはその銀色に輝く三日月のような斬撃をビルに向かい繰り出した！

「いっくぞおおおおー！！！！ッ！！！！」

スバルのローラーがコンクリートとの摩擦により、火花があがる。が、そんなことお構いなしにスバルは亞銀徒へと大きく跳躍した！

「嘘オッ！？ふ、二人共飛び出しおった！」

「でも、あの斬撃……何する気………ッ！？」

その光景を見ていた二人は、思わず硬直する

それは、スバルがしつかりと、斬撃にまるでサーフィンでもするように乗って、空を飛んでいたから

「あ、あほな……魔力の放流に乗るやて………！！？」

「で、でも理論上は可能だよ。だけど……ありえないほどの魔力の密度と、それをビルから落ちる一瞬で演算して繰り出さないといけない。乗る側も、少しでもミスをしたら爆発。なんにしても、危険なことには変わりないよ」

冷静に思考するフェイトが乗るヘリの下では、スバルがその腕を大きく振り上げ、ビルの壁を突き破った！

「よし、成功だッ！！」

それを見届けたイツキは、先ほどガジェット相手に使用したワイヤーを隣のビルへと撃ち込むと、そのままスバルが開けた穴へと侵入した

そして煙のせいか視界が安定しないその場所で、スバルの拳と、スフィアのバリアがぶつかり合ってる光景が確認できた

「スバルッ！退け！」

「うん！」

煙の中から低姿勢で走り抜けてきたイツキに、スフィアは気づかない元々視界が安定しない場所からスフィアの死角を捉えて走りこんできたのだ。一撃は確実だろう

そして、スバルがその拳を一瞬引いた時。まったく真逆の方向からスフィアのバリアに何かが突き刺さった

突然の衝撃にスフィアは衝撃のほうへと視界を移す。が、これこそこの作戦の要となる策だった

「ふんぬがああああっ！」

逆手に持った短剣を袈裟斬りの要領でバリアを決る。と、次の瞬間。イツキの短剣から最後のカートリッジ。薬莢が排出される音が鳴り

響いた

「魔力、全かああああいッ！！！」

その気合の声とともに機体を少しかすめて短剣がバリアを粉々に割る。がスフィアも黙ってみてはいない

それが確認できたと同時に、イツキの正面に向けて何発もの魔力弾を発射した！

「いッ！？　つてえなこんちくしょおッ！！！」

それを真正面から受け止めたイツキは、わざと砂埃を立てるかのように足を動かし、そしてスフィアへと近づいて短剣ではなく拳を突き出した

単純な拳故、スフィアはなんともないが、この動きを封じるものと、先ほどの砂埃を立てた意味が、ここでようやく理解される

「特大のぶちかませッスバルッ！！！」

後ろに向けて放たれたそれは、砂埃が舞っている奥でしっかりと耳に届けられる

大きな三角形を基点に、その両端に円形がつけられた。近代ベルカ式魔方阵が青い光を放つ

そして、それと同時にスバルは目の前で拳大の魔力スフィアを作り出した

「一撃、必倒ッ!!」

その掛け声とともに、拳とスフィアの間に帯状の魔方陣。そして、リボルバーナックルから再び薬莢が排出される

「ディバイイイイイン………バスタアアアア………ッ!
!!!!」

その叫びがビルに木霊したとき、リボルバーナックルでスフィアを殴りつけた!

それが放流となり、イツキの拳により足止めされていたスフィアへと激突。爆発四散した

その際、ディバインが直撃する寸前。やはりイツキはバリアジャケットを掠めながらも回避はしていたが

その爆発音が辺りに響いたと同時にフェイクシルエットで現れていたものは全て消え、スバルも肩で息をしていた

……イツキだけは、ディバインの衝撃に耐え切れず壁にのめり込んでいたが

「ぐぎが……お前等。手加減をし『スバル、終わった!?!』」
「うんっ!」話をきけええ………」

壁にめり込んだ自身をはがしながらも、無視されるイツキには、とりあえずご愁傷様か、m9（ハム）プギヤーという言葉掛けてあげよう

『残り一分ちよい。スバル、あんたあたしとイッキ担げるわね?』

「え? イッキも?」

「悪いスバル。魔力切れだ」

両手を挙げて降参のポーズをとるイッキに、スバルは「しょうがないな」と呆れつつも、ティアナと合流の為イッキを担いで走り出していた

そして、残るスフィアが一つとなったとき。ゴール地点でリインがタイマーを見つめていた……が

「お、きたですね♪」

その言葉の通り。スバルの背中におんぶされているティアナと腰に必死にしがみついているイッキが確認できた

「残り何秒? イッキ」

「残り十六秒……ティアナ……射撃は任せた……」

「言われなくてもッ!」

腰にしがみついてゆらゆら揺れているイッキの代わりに、ティアナが弾丸を一撃。最後のターゲットへと撃ち込んだ

「はい。ターゲットオールクリアです♪」

その言葉を聴いたイッキは、その目はどこぞのザ○の如くグポーンと光らせた

「おいスバルッ！もっとスピードあげろスピード！UP！UP！UP！」

「了解ッ！！魔力全かあああああいいッ！！！」

スバルのその声とともにスピードはぐんぐん上がっていく。そのとき、ティアナにふと疑問が沸いた

「あ、あんた達……止まるときのことを考えてるでしょう……ね？」

「「あ」」

言ったときには、既に遅かった

加速しきったスピードは、すでに止めることなどできなく、そのままゴールへと突進する

「……あ、なんかチョイヤバです」

リインもそのことに気づいたが、とき既に遅し。ゴールゾーンを過ぎてそのスピードは衰えず、そのまま行き止まりに衝突するはず……だった

「ほ、ほ、ホールディングランサーッ！」

「ふ……アクティブガード。ホールディングネットはあの子が張ったからいいよね」

『アクティブガード。作動します』

イッキが弱い一本の槍を壁へ投げつけ、上空に飛んでいた誰か

が杖を向け、桃色の柱をその場に立てる

それと一歩遅れて放たれた槍の先端からネットが広がり、暴走するスバル達をなんとか受け止めきった

「た、助かった……」

「も………無理だよ。ティア」

「完全に……魔力切れ。ガクッ」

イッキが気絶すると同時に二人を支えていたネットが消え、重力に従い落下する

………それも、よりによって気絶したばかりのイッキへと

「ぎゃふっ」

「うへえっ」

「きゃふっ」

背中を思い切り打ち付けたイッキへと、スバル、そしてティアナが落下する。既にオーバーキルであろう

そのショートコントをひとしきり見終わった後で、なにか小さなひとのようなものが蒼い本を手に持ちこちらへむかって飛んできた

「むう………三人ともっ危険行為で減点ですッ！いいですか！？怪我をしたら元も子も無いですよっ！そんなのでは魔導師として駄目駄目ですッ！！」

「……………ちっさ」

「……………も、萌えー。ふにゃぎゃっ!？」

ようやく出せたティアナが一言出すと、それに吊られてイツキもグッドサインをリインへと向けたが、今度は完璧に沈んだ。いや、スバルのリボルバーナックルにて沈められた。のほうが正しいだろう
なににせよ、動物とは思えないその断末魔に、上空にて一人の女性が笑いかけてきた

「あははっ流石にそれはオーバーキルなんじゃないかなあ？」

「え…………？」

「ふえ…………？」

その声に、ティアナとスバルは素っ頓狂な声をあげる
既に目を回しているイツキは気づかないが、綺麗な栗色の髪の毛をツインテールにしてまとめている、綺麗な女性がそこにいた

この女性こそが、スバルが長年追いつけた、憧れの人……………

「でも、危険行為はきちんと反省。しないとね♪」

「あ……………! あ……………!」

よろよろとスバルは立ち上がるが、声がでない

驚き、そしてまだ理解しきっていない頭に、最後のトドメがさされた

「うん、背。おっきくなったね、スバル」

「あ……………ひっぐ……………!」

…………高町なのはの、笑顔をみたとき、スバルは大粒の涙を流していた

それが数十分続いた後、三人（一人は気絶中）はとある場所に呼び出された

話された内容。それは……………

「機動、六課？」

「せや、そこに君ら三人を……一人は気絶中やけど、フワードとして迎えたいんや」

「ティアナは執務官希望で、私が色々教えられるし、スバルはなのはの教導を受けられる。いい話だと思うんだ」

その言葉に、二人は言葉を詰まらせる

階級をあげるなら願ってもないチャンスだ。でも、だからこそ迷う

「まあ、ゆっくり考えてもらって「ごめ〜ん。遅れたー」おーきよったなあ」

はやての言葉の途中。なにやら書類をもったのはが到着する
その声は先ほどの声とは違い、少々子供っぽかったので、つい二人は驚いてしまう

イッキから『グポーン』という音がしたので、すかさずティアナが鳩尾に一発。再び撃沈した

「えっとね……三人の試験結果。でたよ」

「（ごくり）……」

結果。その言葉に二人は息を呑んだ
これを逃せば次は半年後。落ちたら将来に大きな障害が出来る事になる

「三人とも、怪我の報告をせずに反則行為スレスレで、危険行為も減点対象」

「あう……」

なのはの申告にスバルはつい情けない声をあげたが、なのはの「でも」という声に再び目を輝かせた

「どんな状況においても仲間を置いていかないその絆の深さと、イツキ君とティアナのいい作戦。これは十分いい評価だったよ」

最後の通告が始まった。果たして結果は………

「三人とも、ギリギリで合格！おめでとう！」

「「やったーっ！」」

合格。その言葉に普段は冷静なティアナでさえも飛び上がってスバルとハイタッチしている

そのとき、起き上がったイツキの顔面に不可抗力でスバルのかかどが顎に入り、再びイツキは沈もうとしたが……

「お前等……いい加減にしやがれえええッ！」

「「キヤーツ!?」」

怒りが勝ったのか、イツキはついに爆発して二人を追いかけ始めたその様子を、子を見る母親のように見ていた三人であった

「あはは……育てがいがありそうやね」

「なのは、頑張ろう……」

「うん……」

そんな会話が織り成されていた頃……

森の一角で大きな爆発が起こった

その中心。クレーターができている場所には一人の男性が立っていた
傍にはガジェットの残骸が散らばっており、おそらく先ほどの爆発
の理由だろう
大きなローブをきた男性は、少々型の古い銃を持ってその場を確認
していた

『兄貴。まだまだありそうだね』

その銃のコアから発せられた元気な女性の声に、ローブの男性も頷く

「ああ、まあゆっくり行こう。あいつからも急がなくていいと言わ
れてる」

『そんなじゃ、ガラクタ掃除も兼ねて、レッツゴー!』

銃型デバイスの元気にやれやれとした感じをしながら、男性はさ
らに森の奥深くへ入っていった

CHAPTER 1-2 機動六課（後書き）

ようやく主人公を出せた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8169t/>

魔法少女リリカルなのは †空色の弾丸は闇を切り裂いて†

2011年10月9日03時05分発行